

第5章 考 察

第1節 わが国の台場の価値評価と、その中における 網屋浜台場と河下台場の位置付けについて

馬場 俊介（岡山大学大学院教授）

1. はじめに

馬場は、2006年4月以来、近世以前（江戸末期～古代）の土木遺産の全国調査を実施してきた。2009年9月時点での有効データは6128件に達するが、それとは平行して、現地調査も行いその地点数は、過去に別件で調査した件を含めれば、46都道府県の総計1240件に達する。その間、リストの公開（ウェブサイト：<http://kinsei-izen.com/>）に向けてデータの精査を進める一方で、遺産の価値評価を（a）本来の価値（史跡的発想と建造物的発想の合体）と、（b）保存状態（建造物的発想）の2つに分けて行うこととし、まず後者について論文⁽¹⁾をまとめ、次いで、前者を判断する最も大切な要素となる地域的特性について着目し、論文^(2,3)をまとめた。目下は、ウェブサイトの整備と、（b）に関する論文の準備中である。

網屋浜台場と河下台場の位置付けについて、なぜこのような前文を配したかという点、台場についても、これまで国史跡等の文化財指定は行われてきたし、『国別 城郭・陣屋・要害・台場事典』（西ヶ谷恭弘（編）、日本城郭史学会、東京堂出版、2002）のようなデータ集は刊行されたが、それらが体系的な分析と、価値評価に結びついているとは必ずしもいえないことから、これまでの調査の結果を踏まえて新たな観点からわが国の台場の現状と評価基準を設定し、その中で、標記2つの台場の価値を客観的に行おうと思ったからである。従って、鳥根県の2台場の報告書であるにも関わらず、全国の台場を参照している点は、必然的な事象である。ただ、台場に関する現地調査はまだ続行中であり、内容の一部は調査の最終段階で変更される余地は残しているが、現時点における総合的判断から、網屋浜台場と河下台場についての評価は最終的にもほとんど揺るがないものと思われる。

2. 近世台場と近代砲台の類似点と相異点

台場の評価を行うにあたり、時代的には半世紀隔たるが、明治30年代以降を中心とした近代砲台との比較検討を済ませておきたい。というのは、台場が1850～60年代前半にかけてその95%以上が築造され、江戸期とはいえ明治期にきわめて近く、明治期の砲台との類似点と相異点を明らかにしておくことは、意味のあることと考えたからである。たまたま、馬場は、わが国で初めて近代土木遺産の調査を開始し、また、最終的に『日本の近代土木遺産—現存する重要な土木構造物2000選』（土木学会、2001）のとりまとめ責任者を務めた経緯がある。そこで、近世以前（江戸末期～古代）の土木遺産の全国調査と合体させれば、近世台場と近代砲台の双方について、文献・現地調査を行ってきたことになり、その対比から派生する新たな知見を、この場を借りて提示しておくことは学術的にも価

値のある行為だと判断した。

2.1 時代背景

近世台場の99%以上が築かれたのは19世紀～幕末の60年余の間であり、その間、1790～1820年代初にかけてロシア、イギリス、アメリカの「異国船」が、通商を求め、あるいは、フヴォストフ事件やフュートン号事件のような襲撃や脅迫行為を起し、さらには、ロシア人やイギリス人の不法上陸が起こったことで、文政8年（1825）に幕府の「外国船打払令」を出される。これを受けて天保年間（1830～44）に各藩で台場築城が行われるが、これを第1期と呼ぶことができる。その後も、3国の来航が絶えず、最終的に嘉永7年（1854）、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーがアメリカ大統領の親書を携え浦賀に再来、開国を迫り日米和親条約が締結されるに至る。しかし開国後も台場建設はかえって加速し、薩英戦争（文久3年（1863））や2度の下関戦争（文久3・4年（1863・64））を経て、明治維新に至るまで作り続けられる。それらを分類すれば、ペリー直後の安政年間（1854～59）を第2期、攘夷運動の盛んだった文久・元治年間（1861～64）を第3期と分けることができる。要は、海外から遮断されて特殊な社会を保持してきた幕藩体制が、外国船の出現に怯え、「黒船」の威圧でやむなく開国し、結果として外国人に対する排斥運動が盛り上がったことと台場構築とは直結している。

一方、近代砲台の構築は、明治初期、維新後の国防の第一要件として首都を防衛するための東京湾に砲台群が築かれた。次いで、明治10年代末以降、徐々に高まっていった朝鮮半島をめぐる日中両国の緊張関係に合わせて、対馬、下関、由良（大阪防衛）に砲台群が築かれた。そして、日清戦争（明治27・28年（1894・95））終結後の三国干渉で、ロシアの存在感に脅威となり、函館、舞鶴、呉、芸予、佐世保、長崎に砲台群が築かれる（明治30年代）。実数としては、最後の明治30年代のものが最も多い。これらを総合すれば、当初は、開港直後で自己防衛の意味合いが高かった砲台だが、明治政府の軍事強国化政策を反映して、対外戦争を想定しての、国内の政治・軍事拠点の防衛というように、砲台の築造目的が変化していく。換言すれば、明治20年代以降の砲台の築造は、政府の軍拡路線の反映とすることができる。この点、専守防衛であった近世台場とは、大きく異なる。

2.2 構造材料・構造形式

近世のどの土木・産業構造物もそうであったように、近世台場の構造材料は土と石であった。それは、砲撃時の振動を吸収するには土塁が最適で、また、被弾時の損傷を免れるためには石垣の使用が望ましかったからである。しかし、実際には、すべて土塁で形成された台場も多く、土塁と石垣、あるいは、石塁とを混合させたものとはほぼ同数である。台場の平面プランという観点では、『国別 城郭・陣屋・要害台場事典』は、出現時期と相関させて、第Ⅰ期：文政8（1825）～嘉永6年（1853）：方形・長方形プラン、第Ⅱ期：嘉永6（1853）～安政3年（1856）：稜堡多角形・扇形プラン、第Ⅲ期：安政2（1855）～元治元年（1864）：稜堡型の確立期、第Ⅳ期：元治元年（1864）以降：トーチカの出現、第Ⅴ期：元治元（1864）年以降：防塁形の5つに分けている。実際には、これらは新しい形式が出現・普及した時期を指しており、これらの分類とは無関係に、多様な形態の台場が各藩によって造り続けられてお

り、その全容も明らかでないことから、凡その目安と考えた方がいい。ただし、第Ⅱ期における稜堡型の出現は、和式から洋式への転機であり、その後の台場プランに大きな影響を与えたことから、重要な分岐点といえることができる。

近代の砲台は、これも、近代の土木・産業構造物がそうであったように、初期の石・煉瓦から、後期のコンクリートの使用へと大きな変化を見せる。各種の分野の中でも、砲台に代表される軍事施設が、防波堤と並んで最も当時高価だったコンクリートの使用が早かった分野である。軍事立国と貿易立国を目指さざるを得なかった当時の日本にとっては当然の帰結であった。砲台の平面プランは、フランス人のお雇い外国人が直接関与した初期のもの、フランス式の流れを踏襲した20年代のもの、陸軍工兵隊が定型的なパターンで設計した30年代のものに分けることができる。当時の世界標準、煉瓦の使用、大砲の巨大化等に伴い、近世台場とは、当初から全く様相の異なるものとなった。

2.3 分布状況

近世台場、近代砲台とも、それらの分布状況は、概略的に見れば、2.1の時代背景と連動している。しかし、細かく見れば、その差は歴然である。近世台場について見れば、まず、主要な台場が築造された場所は、①江戸と大坂を防衛するための東京湾、淡路島周辺、②主要な海峡（津軽海峡、関門海峡、対馬海峡）、③異国船の接近地や上陸・襲来地（蝦夷地、津軽半島、常陸国沿岸、下田、長崎、薩摩）に集中しているが、それとは無関係に、幕府の命を受けて全国の沿岸で、異国船が接近可能な深度を持った海岸部には台場が築造された。これは、2.1で述べたように、外国人の存在が日本にとって脅威、あるいは、忌避すべきものと考えられていたことから、全身を「針鼠」のようにして、守ろうとしたからであった。

一方、近代砲台は、初期の①東京湾要塞は別として、外へ打って出るための好戦的な国家観にあって、②守るべき拠点だけを防備するものであり、全国的に展開していた訳ではない。特に重要で大規模な砲台は、呉、佐世保などの海軍鎮守府の防衛と、大阪を守るための由良と芸予のライン、そして、台場同様3つの海峡の防衛に集中し、それ以外の場所には全く計画されなかった。この点が、近世台場との大きな違いである。

2.4 保存状態

全体の築造個数から見れば、近世台場の方が圧倒的に多数を占める。しかし、①近代砲台に比べれば時代的に古く、②小規模なものが多く、③主要な構造材が土であり、④人家と離れた辺鄙な場所が選択され、⑤近代砲台として改造されたものもある、などの理由で全体の比率から言えば、保存状態の良好なものの割合は低い。しかし、大砲や木造建屋等は別として、台場のプランがほぼ竣工当時の姿を保っているものだけをあげても全国で10は下らない。この数値は、ある程度部分的にでも当時を彷彿とさせるものを入れれば、20ないし30に達する。逆に、それ以外の台場の保存状態は一般に言って劣悪、もしくは、大半が消滅してしまい痕跡すらなくなったものが多数を占めることもまた、確かである。そういった意味で、完全とは言えなくても、ある程度部分的にでも当時を彷彿とさせる

台場の存在価値は非常に高い。

一方、近代砲台は築造された数が限定され、材料が、意図的に破壊しない限り形態を失わない石、煉瓦、コンクリートの混成体であるため、整備されているか、放置されているかの違いはあっても、現存している確率が高い。ただ、状況のよいものに限定すれば20ヶ所程度に絞られ、近世台場を大きく凌駕するわけではない。

3. 現存する台場の、構造材料と保存状態の現状

3.1 土塁か石垣か

現存する台場に限定した全体的な傾向として、北海道から関東、北陸・山陰の台場は土塁のみによるものが多い。逆に、東京湾周辺から伊豆半島、淡路島、瀬戸内海、九州（特に、長崎）では石垣が併用されるものが多い。台場の設計には、①設計を任された各藩の砲術家の思想、②先進的な稜堡式台場の場合は石垣の使用が必須などの「傾向」があり、①江戸、下田、大坂、長崎の重要性、②瀬戸内・九州の石造文化圏（石材が容易に入手できた）の2要因が大きな影響を与えているものと推察できる。

ただ、同じ日本海側でも、富山、石川、福井、鳥取、山口は一般に土塁型であるのに対し、今回調査・分析の対象としている島根（松江藩）の残存2台場が何れも石垣型というのは、たまたま残ったものが石垣型で、消滅したものが土塁型だった可能性はあるものの、特徴的な傾向と言えよう。

3.2 平面プラン

現存する台場に限定してプランから見ると（年代順）、

直線式：網屋浜台場（島根、1799）、初崎台場（茨城、1853）、室積台場（山口、1864）

方形・コの字：魚見岳台場（長崎、1810）、川奈台場（静岡、1843）、出張陣屋（北海道、1856）

くの字：富戸台場（静岡、1843）、愛媛（天巖鼻台場、1850）、鷗鳥台場（北海道、1852）、樺崎台場（愛媛、1855）

扇形：平館台場（青森、1849）、生地台場（富山、1851）、梶台場（福井、1852）、河下台場（島根、1863）、須崎台場（高知、1863）

稜堡式：戸切地陣屋（北海道、1855）、品川第三台場（東京、1854）、品川第六台場（東京、1854）、高崎台場（兵庫、1858）、神奈川台場（神奈川、1860）、松帆台場（兵庫、1863）、五稜郭（北海道、1864）、祝町向州台場（茨城、1864）、舞子台場（兵庫、1864）、由良台場（鳥取、1864）、浦富台場（鳥取、1864）、境台場（鳥取、1864）、碓川台場（岩手、1865）、堺南台場（大阪、1866）

防塁形：女台場（山口、1863）

トーチカ：和田岬砲台（兵庫、1864）、西宮砲台（兵庫、1866）

となり、必ずしも、2.2のようにないことが分かる。しかし、稜堡式の出現は安政元年（1854）であり、全体の残存数でも群を抜いて多いことも分かる。稜堡式と同じに分類されている扇

形は、意外と古くから出現していることが分かる。この辺り、扇形でも、何をもって洋式と判断するかが問題となるであろう。

3.3 滅失・放置か保存・活用か

台場全体の中で、滅失・放置されているものの割合は非常に高い。史料上、名前は挙がっていても、所在確認ができていないもの、はっきり消滅が確認できるものを合わせると9割を軽く越える。今回の全国調査でリストに挙がっているものが、残存するすべてだとはとても言えないが、それにしても総数僅かに120程度というのは、あまりに少ない数字である。その中で、公園としてきっちりと管理されていて、形状をよく留めているものは、五稜郭、戸切地陣屋、白老陣屋、鷗鳥台場（北海道）、平館台場（青森）、品川第三台場、品川第六台場（東京）、生地台場（富山）、寺中台場（石川）、梶台場、松ヶ瀬一号・二号台場（福井）、西宮砲台、和田岬砲台（兵庫）、由良台場、浦富台場（鳥取）、河下台場、網屋浜台場（島根）、女台場、室積台場、泊台場（山口）、樺崎台場（愛媛）、須崎台場（高知）、魚見岳台場、四郎ヶ島台場（長崎）くらいのものである。ただし、松ヶ瀬一号・二号台場（福井）は土塁をセメント状のもので覆っており保存方法が良くない点、品川第六台場は接近がほぼ不可能な点、和田岬砲台はアクセスにかなり制約がある点、鷗鳥台場と網屋浜台場はあまりに小規模な点に問題がある。

4. 代表的な台場

ここでは、わが国を代表する台場、すなわち、保存状態の良い台場について、網屋浜台場や河下台場と比較する意味を込めて紹介する。なお、本章の記述は、一部、『国別 城郭・陣屋・要害・台場事典』に負うものであることを明記しておきたい。

4.1 北海道： 戸切地陣屋（安政2年（1855））と五稜郭（元治元年（1864））



写真 19 戸切地陣屋



写真 20 五稜郭

戸切地陣屋（国史跡）は、幕命により松前藩主・松前崇広が築いたもので、全体が星型四稜形をしているだけでなく、東側の稜堡部が「亀が首を出した」ように突出しており、そこだけで6つの砲座が置かれている。この部分だけ見ると、函館五稜郭と同じパターンになっており、国内でも他に例の

ない珍しい構成を、五稜郭が完成する9年も前に造った点は高く評価できる（五稜郭の着工は安政4年なので、五稜郭を参考にしたという属説は間違い）。『事典』には、「縄張は武田斐三郎という説もあるが、江川門下の竹田作郎であったらとされている」とある。武田斐三郎は、戸切地陣屋の2年後に五稜郭の設計に係わった人物なので、幕府直轄の函館奉行の関係者とはいえ、知恵を貸した可能性は否定できない。それに対し、松前藩の奉行であった竹田作郎の師である伊豆菰山の代官・江川太郎左衛門英龍は、嘉永6年（1853）に着工した品川台場群の設計者だが、品川台場群と戸切地陣屋は同じ稜堡式でも、多角形と星型という根本的な違いがある。戸切地陣屋の着工が、品川台場群着工の僅か2年後だけに、竹田に師を越えた発想ができたかと言えば疑わしい。最後の説は、松前藩砲術師範・藤原主馬の設計というものであり、この人物の累計は不明だが、砲術師範というのが確かであれば、それなりに現実性を帯びた説であろう。

このように、死角がないように城壁から外向きに突き出した稜堡は、17世紀フランスを代表する軍事技術者であったヴォーバンが体系化した形式で、彼は、1680年以前、1682年、1698年とより高度に防衛できる形式を提案していった。しかし、こうした要塞システムは、大砲の着弾距離が最大でも1km以下だったナポレオン時代だから有効だったが、着弾距離が3～5kmに延びた19世紀半ばでは時代遅れの構造物でしかなかった。その時代の最先端は、岩盤と一体化した巨大な多角形要塞であった。そういう意味では、オランダの古い要塞を敷き写しにしたような、この種の稜堡式台場が、幕府の築く主要台場の中核となっていたことは信じがたい時代錯誤である。しかし、見方を変えれば、こうした「古典的な」台場が日本に数多く造られたことは、今日的視点からすれば、世界に見られない我が国固有の社会的資産と言えよう。

戸切地陣屋は、星型の先端と先端の距離が、長辺227m、短辺206m（品川台場の約1.25倍）の規模で、空堀と土塁の組合せが美しい。雑草の伸びない北海道ならではの綺麗な遺構である。

五稜郭（国特別史跡）は、安政2年（1855）に結ばれた日米和親条約によって開港させられることになった函館港の警護のため、函館奉行（竹内保徳、堀利熙、村垣範正の3名）の命で、先に名前の出てきた武田斐三郎の設計、備前の石工・井上喜三郎の施工により築かれた。武田斐三郎は、伊予大洲藩士で緒方洪庵（蘭学者）の適塾（大坂・船場に開いた蘭学の私塾）などで学んだ人物で、当時、函館奉行諸術調所の教授であった。着工は安政4年（1857）、完成は元治元年（1864）と、完成までに7年を要した。戸切地陣屋で1ヶ所だけ使われた「亀が首を出した」形態を5角の星型稜堡すべてに採用したもので（出塁も1つ持つ）、よりヴォーバンの古式に正確に則った形となった。17世紀のオランダで一般的だった要塞の形態をそのまま取り入れたともいえる（例えば、ズウォレの町の11の稜堡と、1つの出塁を持つ要塞は、今でもよく残っている）。

五稜郭は、5つの星の先端部同士の各辺長が約300m、星の直径（先端部と、反対側にある出塁の先端部の距離）が約520mもある日本一巨大な台場である。土塁の高さは7.5mで、塁壁は、寒冷地のため凍結で水堀の土手が崩壊しないよう、堀の両面が石垣になっている。因みに見事な石積みを見せた井上喜三郎は、品川台場の築造にも携わった備前岡山出身の石工である。側壁部の石材には地元産の安山岩が使われたが、隅角や「はね出し」など重要な部分には、備前産の花崗岩が使われた。

4.2 青森： 平館台場（嘉永2年（1849））

平館台場（県史跡）は、弘化4年（1847）、平館村沖に外国の捕鯨船1隻が碇泊、食糧を求めて上陸したことから大騒ぎになった事件を受けて、弘前藩によって築かれた。藩の兵学師範を務める貴田惟邦が縄張を命じられ、当時主流であった和風台場とは異なり、扇形をした洋風台場を初めて日本にも



写真 21 平館台場



写真 22 松前街道松並木

たらした。すべて土塁で造られた台場は、建造当初の姿をそのまま残し、前面土塁の弧長（外縁部間）111 m、後方土塁の弧長 69 m、高さ 2.1 m、前面土塁は8つに分かれ、7門の砲が据えられていた。

扇形と並ぶ平館台場の大きな特徴は、台場の前後に残る樹齢 300 年を越える立派な松並木との合体である。松並木そのものは、弘前藩の4代藩主・津軽信政によって植樹されたとされるが（恐らく、1660～80年代）、平館台場を海岸沿いの松並木のさらに浜辺寄りに構築したことから、擬装の意味で台場土塁に33本の松を植えた。松並木は、青森県がまだ松喰い虫に被害を受けていないことから、全長約 1.8kmにわたり健在であるが、台場の松も 150 年を経過して街道松並木と一体化しており、風致としても素晴らしい。

4.3 東京： 品川第三台場（安政元年）

品川第三台場（国史跡）は、ここで敢えて記載する必要がないほど有名であるが、わが国に稜堡式西洋台場が普及していく契機となったと言われている点で、欠かせないと判断した。設計者は、伊豆韮山の代官・江川太郎左衛門英龍であり、ペリーが浦賀に来航した翌月の嘉永6年8月に着工、1年3ヶ月の間に6基が完成した。現在は第三、第六台場だけが残されている。江川が構想した稜堡式台場は、正確に言えば、五稜郭のようなヴォーバン式星型要塞ではなく、オランダで17～18世紀に多く造られた形態とも異なっているため、参考にしたと言われるオランダ築城書の選択に誤謬があったのではと、感じざるをえない。上述したように、品川台場群着工の僅か2年後に星型稜堡式の戸切地陣屋が完成していることからすれば、はっきりと時代遅れと断ぜざるをえない（19世紀中葉という世界的尺度から見れば、双方とも時代遅れであることは既に述べた通りである）。それでは、品川台場群の構想が、後世にどれほどの影響を与えたのであろう。確かに、幕府のお膝元で稜堡式西洋台場が造られたことから、それまでの和式台場が時代遅れとみなされるきっかけを作ったであろうことは十分理解

できる。しかし、代表的な星型稜堡式台場、すなわち、神奈川台場（1860）、天保山台場（1864）、舞子台場（1864 中断）は勝海舟の設計であり、そこに江川の発想が受け継がれていたかどうかは疑わしい。むしろ、海上に台場を構築したという技術面を評価した方が、技術史的には妥当なような気がする。この観点からすれば、品川台場の後継者は、維新後の東京湾要塞第一～三海堡になるであろう。

品川第三台場は、173.8 m × 173.3 m（基部）、石垣高さ 7.8 m の巨大な海上構造物であり、高い石垣と、それを可能にした捨て石を軟弱地盤から立ち上げるため、梯子胴木が使われた。すなわち、江戸時代の河川構造物の構築技術が全面的に採用され、150 年を経過して若干の孕み等はあるものの、崩壊することなく石垣が残っている。この石垣を築いたのが、前出の、後年、五稜郭にも関与した備前石工・井上喜三郎であった。

品川第三台場は、臨海新都心・お台場地区のシンボルとして利活用されているが、近くに残置する第六台場を立ち入りを原則禁止して放置保存するのは構わないが、川鵜の生息地として荒廃に任せるのは良くない。



写真 23 品川第3台場



写真 24 品川第3台場とお台場地区

4. 4 福井：梶台場（嘉永4年（1851））

梶台場（国史跡）は、特に周辺に外国船が接近するような緊急事態は起こらなかったものの、幕府の台場築造方針に沿って丸岡藩により造られた台場である。縄張は、藩の砲術家・栗原源左衛門で、この人物は、高島流砲術の創始者・高島秋帆の門人であった。梶台場は、前述の平館台場と並び、当時主流であった和風台場を採用せず、扇形をした最初期の洋風台場として知られている。そして、平館台場は、建造当初の姿をそのまま残している希少な例としても知られている。規模は、弧長約 33 m、高さ約 1.8 m で、今回取り上げている 7 つの台場中最小である。しかし、5ヶ所ある土塁の開口部（砲眼）は見事な石組で補強され、土塁内側の基底部に低い石垣が設けられている。土塁だけによる台場が当たり前の日本海沿岸の台場とし



写真 25 梶台場

ては異例の構造である。

梶台場の最大の魅力は、その完璧なまでの保存状態が、構造物だけでなく、周辺環境、すなわち「かつて海に大砲を向けていた」という台場の使命を最もよく感じさせる点にある。岬の先端に造られた台場は、海岸の間際にそのままの形で残り、押し寄せる波と風も当時のままである。これほど「当時を感じさせる」台場は、全国でもここ一か所しかない。

4.5 鳥取： 由良台場（文久4年（1864））

由良台場（国史跡）は、鳥取藩が因幡～伯耆の両国の海岸に沿って築き、かつ現存している6ヶ所の台場中、抜きん出て大きな稜堡式土塁台場である。縄張は、藩の反射炉御用掛・武信潤太郎で、この人物は、前記梶台場の場合と同じ高島秋帆の門人であり、さらに、洋式兵学者・砲術家であった池部啓太の門人でもあった。由良台場は、この武信潤太郎の設計・普請、そして、完成後には、この台場の警固役を務めるという経緯から、他の台場と比べて格段に大規模に計画・築造された。形式は、非星型の六角稜堡式と、1860年代としては保守的な形態を採用、東西125m、南北83mで、土盛り高さ10.5mである。

由良台場は、周辺を含めて公園整備された関係で、保存状態は非常に良い。この点、規模だけでなく、保存状態でも、鳥取藩の台場群の中で飛び抜けている。唯一残念なことは、台場と海岸の間に高規格化された国道が通り、海との関係性が地理的にも、視覚的にも損なわれてしまった点である。



写真 26 由良台場

4.6 山口： 女台場（文久4年）

女台場（菊ヶ浜台場）（市史跡）は、長州藩とも呼ばれる萩藩が、文久3年旧4月に山口に藩庁を築き、藩主自ら移住、5月には英・米・仏・蘭軍と交戦して惨敗する第一次下関戦争を経験したという時代的潮流と強い関係にある。山口に藩都が移った後の萩では、翌6月には住民の間に、外国の襲撃に対し自衛しようとする動きが高まり、漁民、城下の老若男女を問わず一丸となって工事に参加、1ヶ月余で完成に至った（大砲が設置され、台場として機能し始めたのは翌文久4年正月）。女性が多く参加したことから、女台場と呼ばれることになった。

この台場の特徴は、こうした故事由来ではなく、長さ100～200m、高さ5mほどの直線形の土塁が、互いに少し重なるように海岸に沿って長く延びる構造を採用した点にある。この形式は、わが



写真 27 女台場

国では初めてのものであり、防塁形と呼ばれ、後継として後浜台場（1865年以降、現存せず）を生んだ。

現存するのは城に近い西側の3分の1程度、3ヶ所、総延長約240mほどである（歩ける部分はもっと短い）。今回取り上げた7ヶ所のうち、唯一完全に残っていない台場であるが、残っている部分については保存状態が良いことと、棒状なので、3分の1でも雰囲気は感じられること、そして、このタイプの第1号であり、唯一残存することから採択した。女台場にも、平館台場同様、数列にわたって松が植栽されている。恐らく、同じ目的（擬装）で植えられたものであろう。

4.7 長崎： 魚見岳台場（文化7年（1810））

長崎は、鎖国中の日本にとって唯一の開港場であったことから、既に承応2年（1653）に7ヶ所の台場（古台場）が造られていた。しかし、18世紀末以来オランダとチャーター契約を結んだアメリカ船が、オランダ国旗を掲げて長崎に入港するようになり、それに慢心したのか、享和3年（1803）にレベッカ丸が堂々とアメリカ国旗を掲げて入国し通商を断られる事態が起きる。文化元年（1804）には、蝦夷地の問題で幕府が一番嫌っていたロシアのレザノフ艦隊がロシア皇帝の親書を携えて長崎に入港、翌年まで放置された後に放逐される事態も起きる。さらに、文化5年（1808）に、英国軍艦フュートン号がオランダ国旗を掲げて入港後、本性を顕して強圧的に脅迫した「フュートン号事件」が発生する。事ここに至り、幕府は、急遽、長崎に12台場、周辺に8台場を増設したが、その1つが魚見岳台場（国史跡）であった。

魚見岳台場は、福岡藩主・黒田斉清の施工によるものだが、縄張を誰が行ったかは不明である。一番高地に一ノ増台場、下に二ノ増台場、最も海岸近くに三ノ増台場を配する3段構成の台場で、中核は、高い石垣で知られる二ノ増台場である。その他、総石造りの御石蔵、常住木屋跡、道具木屋跡も残るが、意図的あるいは修景的な整備も行われておらず、そうかといって遺構の保全状態が悪いわけでもなく、平館台場、梶台場と並び、建造当初の姿のまま経年老化してきたという意味で、最も理想的な状態にある台場の一つである。さらに、今回評価の対象としている松江藩の網屋浜台場を除けば、現存する建造当初状況が残る最古の、しかも、網屋浜台場に比べれば遥かに大規模な台場であり、その価値は非常に高い。



写真 28 魚見岳台場（二ノ増台場）

5. 網屋浜台場と河下台場の価値

5.1 網屋浜台場（寛政11年（1799））

網屋浜台場に関する原典史料は残されていない。松江藩最後の藩主・松平定安（1835～82）の伝記を長男の松平直亮（1865～1940）が1934年に執筆した中に、「十六島浦アミヤ」が寛政11年に築造



写真 29 網屋浜台場東側石垣



写真 30 網屋浜台場西側石垣

されたと記されているに過ぎない。この伝記には、現存しないが、他にも 17ヶ所の台場が寛政 11 年築造と記されている。この寛政 11 年という時代は、長崎の古台場を除けば、全国で最も古い台場となる。『国別 城郭・陣屋・要害・台場事典』にも、この台場については名前すら書かれていない。この場合、疑問が 2 つ発生する。もし、寛政 11 年という年号が正しいとすれば、松平定安が生まれる 36 年も前に造られた台場のことを、なぜ晩年の定安が覚えていたか（晩年でないと、息子が 15 歳にも達していない。つまり、70 歳近くになって父の伝記を執筆する時まで、正確に覚えていられる年頃ではなくなる）。晩年期の二重の記憶の連鎖は、果たして正確なのであろうか？あるいは、定安は何かの史料を所有しており、それを直亮も見たことがあるのか？詳しいことは何一つ分からないし、今回の総合的な史料調査でも確認することはできなかったと聞いている。2 つ目の疑問は、もし寛政 11 年が正しいとして、松江藩は、幕府が文政 8 年に「外国船打払令」を発する遙か以前に、費用のかかる台場築造をなぜ自主的に行なったのか、というものである。これが蝦夷地ならば、幕府が寛政 12 年（1800）に東蝦夷地を直轄としたことから、理解できなくはない。しかし、蝦夷地や長崎から遠く離れた松江藩で、藩を挙げて 18ヶ所もの台場を一斉に築かなければならないような事態が、18 世紀の末に起こったのか？今回の調査を詳しく見ると、享保 3 年（1718）の幕府の御触書「唐船が漂流した場合は大筒や鉄砲で打ち払う」に倣い、同年 7 月に川下村に唐船が来航した際、大筒を船柱に命中させるなどして追い払ったとの記載はある。ただ、この事件と寛政 11 年の間には、80 年もの歳月が流れており直接の因果関係はない。次いで、寛政 5 年（1793）に鵜峠浦、鷺浦、宇龍浦、日御碕浦に唐船警備として総 33 艘の水主・手替を選定するなど「唐船番」が整備され、同 11 年に「唐船番隊」の組織が整備され、これに伴い遠見番所・台場が設置されたとある。この記述を見る限り、確かに何の矛盾も感じられない。しかし、他の藩でこのような動きがあったという情報は、仙台藩で正保 3 年（1646）に亘理磯の浜と泊崎に唐船番所（見張り場）が置かれたという程度しかない。仙台藩の唐船番所と、松江藩の唐船番とは、時代も異なるし、目的も全く別種のように思われる。そこでもし、寛政 11 年に「唐船番隊」が置かれ、それに伴い「台場」が設置されたと古文書に記載があるとすれば、間接証拠としては十分であり、網屋浜台場がこの唐船番隊の台場に該当する蓋然性はかなり高くなる。

次いで、台場の構造的にはどうであろう？ 網屋浜台場は隣接する 2ヶ所の石垣から構成されてい

る。東側石垣は長さ 10.3 m、高さ 2.1 m、西側石垣は長さ 8.8 m、高さ 1.6 mである。東側の石垣は、ほぼ中央で石積が若干異なっており、向かって右側が典型的な江戸期の布積、向かって左側は谷積的な要素が加わり石も小型で乱れていることから、後世の修復と類推できる。西側の石垣は全体に谷積のイメージが強く、後世の追加のようにも見受けられる。ただ、何れにせよ、石垣の背後に大砲を置くようなスペースもなければ、砲座を置いたような窪み、被弾を防ぐような構造も見られない。これは、トレンチの結果からも、石垣背後の土があまり乱されていないことから立証されている。それでは、果たしてこの2つの石垣は、台場としての機能を有していたのであろうか？ 周囲の地形から、兵士が常駐するスペースは全くない。従って、せいぜい、万一「唐船」が接近した場合に、享保3年の時と同じように、和式の大筒で打ち払うための台として使われたとしか推測はできない。

ただ、たといそうであるにせよ、対西欧の台場群以前の、「唐船番隊」の砲台遺構としては恐らく現存するわが国唯一のものであり、きわめて貴重な遺構とみなすことができる。石垣の残り具合も完全であり、きちんと整備すれば、4章で取り上げた、わが国を代表する台場とみなすことは十分可能である。

5.2 河下台場（文久3（1863）年）

河下台場は、緩やかに弧を描く扇形の西台場と、小規模ながら稜堡を有する東台場に分かれ、しかも、日本海側でありながら本格的な石垣を有している。石垣を伴っている点では、網屋浜台場と同じであり、松江藩の台場の特徴とすることができる。縄張を、誰が行なったかについて、記録は残されていない。ただ、西台場と東台場は、同時期であるにもかかわらず、形態が全くことになっている点について、合理的な推測はできないが、平面プランは別として、基本構造が土塁を基本とし、基礎、もしくは、背面を石垣で補強するという点では、発想は共通している。すなわち、大砲発射時の振動を抑えるために土塁を用い、被弾時の補強のために石垣を用いるという思想である（萩野流に近い）。

5.2.1 西台場

西台場は、2段、もしくは、3段になった扇形の西洋式台場である。前面は土塁、背面は石垣で補強されている。大砲は、2段目に置かれ、もし、3段目が当時からあったとすれば、作業スペースに



写真 31 河下台場・西台場



写真 32 河下台場・西台場暗渠

充てられていたものと思われる。全体にきわめて平坦な台場で、火薬庫、弾薬庫のあった形跡がない。ただ、一番西端の、現在小屋の建っている部分がL字型に高石垣で補強され、その東側にも突出部があることから、小屋の建っている辺りに何らかの施設があった可能性は否めない。また、遺構の西端に沿って掘られた幅1 mほどの高石垣で守られた溝は、土塁の中に穴となって入り込んでおり、この種の物が他の台場で見られないことから、意図不明の構造物となっている。この溝状の石構造は、江戸期の描画と推測される出典不明の絵図には記載されていないが、石積の方法が、他の部分と酷似しており、ほぼ同時期の構造物と思われる。そうすると、当然、台場に付随した施設であるはずで、可能性としては、松帆台場との類推で弾薬庫（石の砲弾置き場）と類推できなくはない。

全体的に、3段目、及び、西端の小屋を除けば保存状態はよく、わが国を代表する扇形台場と言える。

5.2.2 東台場

東台場は、高く盛った稜堡の両面を石垣で補強した西洋式台場である。背面は2段となっているが、隣接する建物や、耕作地によって埋没・改変され、原形がなかなか捉えにくい。ただ、石積方法が西台場とほぼ同じであり、同時期、同じ石工の手になるものであろう。

残存する石垣の量は東台場の方が多く、高さもあって見栄えがするが、オリジナルからの改変度はこちらの方が大きく、また、稜堡式台場の残存数は結構多いことから、重要度という点では、西台場に比べて劣るのではないかとと思われる。



写真 33 河下台場・東台場

6. 結論

国内に現存する台場を、その保存状態を中心にして総覧した結果、次の結論を得た。

- (1) 網屋浜台場は、わが国に現存する最古の台場であり、かつ、唯一の「唐船番所」に係わる砲台であり、さらに、保存状態もきわめて良好であることから、わが国の近世史の欠けた部分を補填する重要な遺構として整備・保全していくことが望ましい。
- (2) 河下台場は、1860年代に全国で数多く造られた定型的な西洋式台場であるが、特に、西台場は、残存数の少ない扇形台場に属し、日本海沿岸では稀な石垣を持つ構造であるとともに、保存状態も良好で、今後、整備・保全していくことが望ましい。一方、東台場は、西台場と異なる稜堡式を採用し、残存する石垣も立派で各所にわたることから、多少保存状態は悪くても、西台場と一括した施設の片割れとして整備・保全していくことが望ましい。

(参考文献)

- 1) 近世以前の日本の土木遺産の総合調査—保存状態に関する施設別の価値判断の指標, 馬場俊介, 樋口輝久, 劉 瑜, 土木史研究 (論文集), 27 卷, 2008, pp.61-76.
- 2) 近世以前の日本の土木遺産の総合調査—中国地方にみる独自の地域性, 馬場俊介, 樋口輝久, 劉 瑜, 土木学会論文集, 部門 D, Vol.65, No.2, 2009, pp.175-186.
- 3) 近世以前の土木遺産に見られる都道府県ごとの地域の特徴, 馬場俊介, 樋口輝久, 丹羽野真也, 山元 亮, 土木史研究 (論文集), 29 卷, 2010, (登載決定済み: p.17) .